

コラム3 熱海・伊東における被害と救援

(1) 熱海・伊東の関東大震災時の被害

伊豆半島の東海岸域に隣り合う伊東と熱海は、明治以前から著名な温泉町である。特に、熱海の温泉は、古代から親しまれてきた歴史がある。熱海の南には、港湾地として知られる網代・宇佐美・伊東・川奈などの漁村が続く。これらの集落では、伊豆諸島周辺海域や南洋域まで出漁し、鮪、鰹、鯨、鯖などを漁獲して、全国屈指の水揚げを誇っていた。

このように温泉と漁村という牧歌的な景観に恵まれた伊東と熱海だが、関東大震災では震源域に最も近い陸地の一つであった。このため、地震動も激しく、家屋倒壊や土砂災害も発生しているが、熱海・伊東の被害を大きくしたのは、地震直後の津波による大被害であった。被害概要は表コラム3-1のとおりだが、死者の多くは津波によって犠牲となったものである。

表コラム3-1 熱海と伊東の被害状況表

	死者・行方不明	負傷者	全壊	半壊	全流失
熱海	100	181	340	490	172
伊東	116	361	256	516	461

出典：『静岡県大正震災誌』（1924）より作成

(2) 地震直後の証言と記憶

伊東市では、1971（昭和46）年に行われた関東大震災の体験者からの聞き取り調査の記録（伊東市総務課，1971，「関東大震災を語る地域集会概要記録」）や被災直後の子供たちの作文集（宇佐美尋常高等小学校，1923，「大正大震災記」一巻・二巻）などの資料が比較的良く残っている。体験者の多くが、被災から50年を経てもなお、地震直後の記憶を明確に語っており、この大地震が一生忘れることのできない鮮烈な記憶となっていることが読み取れる。体験談や作文集などから事例を紹介しよう。

子供たちの作文集によると、避難した場所は「竹やぶ」が圧倒的多数で、単に「藪」と記された例や「麦畑」という例もある。また、寺社境内にも多くの避難者が集まり、家族ごとに余震に震えながら夜を明かしている。この野宿は、数日間に及んでおり、周囲の村の消防団が炊き出しをしてムスビ飯を配っている。

天然の良港を抱えた川奈地区では、津波で流れた船が港の中を漂い第二波で大破するのを高台から傍観していたという例や、家にサイフを忘れて取りに戻ったところを



写真コラム3-1 寺の境内に避難した人々

（熱海市網代 平井家所蔵）

津波にさらわれたものの、沖にいた船に救助されたという例がある。また、津波が押し寄せた時に海上へ逃れようとした船は、操船意図とは逆に数百メートルもの距離を津波に引きずられて河口部まで移動してしまったという例や、沖に居合わせた船が漂流者を救助した例もある。

津波の寄せる様子や引き波で破壊される家々の姿を避難しながら目撃した子供たちも多いが、広い平野の中で高台に逃げる時間がないために、海岸の松の大木によじ登って助かったという体験談もある。

熱海地区では、ゴーッという地鳴、立ってられない激しい揺れとともに、津波で家が何十軒も流されていた。津波が初川を遡り、清水町通りまで来たという目撃談が伝わっている。

熱海市立多賀小学校にある『學校沿革誌』によれば、地震の2、3分後に高さ一丈五尺位の海嘯が来たこと、午後2時37分までに強い余震が8回あったこと、村民は社寺境内等の竹藪に1日～2日露営していたこと、3日には「朝鮮人襲来」の噂が伝わり、不安が広がったが、7日ごろに京浜地方の情報が伝わり、汽船が入港して、三島砲兵隊が警戒にあたりはじめたことによって人心が落ち着き、10日より授業を開始したことが記録されている。

地震で倒潰した寺院もあるが、寺社地の境内は避難した人々が集中する空間であった。熱海では、御用邸をはじめ、別荘地も避難所として解放された。また、宮内省では、状況視察のため、9月12日に侍従山縣辰吉（有道）を駆逐艦「波風」にて伊東・熱海に派遣した。

熱海では、震災によって軽便鉄道が大破して廃業となり、2年後の1925（大正14）年に国鉄熱海線が開通したことによって大衆保養地化が進む結果となった。温泉町の内部では、温泉の新規開鑿の規制が解除され、前近代の湯戸制度の流れを継ぐ大湯を中心とした体制が崩れ、長期滞在する湯治場から短期滞在客を主とした大規模な温泉街への変化を加速させた。

（3）避難と救済のあれこれ

伊東と熱海は、高級別荘地でもあったため、別荘に避暑に来ていた人の体験談もある。

財部元子（故人）さんは、新学期が始まる日なので、本来は東京で惨害を体験するはずだったが、前日、東京から迎えに来た母親が、何となく嫌な予感がするというので、9月1日も伊東の別荘で夏休み延長の1日を過ごしていた。地震で道路に大きな亀裂が入り、避難も大変だったが、寺の境内で夜を明かした。東京は崩壊したという流言で東京から離れた方が良いと判断し、名古屋の縁者の元で避難生活をしたという。

伊東市域では、海に面した伊東・宇佐美・川奈地区に津波被害が集中した。このため、周囲の村落からは、地震直後に消防団や青年団が被災地に応援に入り、倒潰家屋の撤去や夜間の警戒、遺体収容作業などにあたっている。兵役にあった者では、三島の駐屯地から箱根へ出動し、避難者を収容している例がある。

被害状況の把握とまとめは、町内会単位で行われている。ガリ版刷りのカード方式で各戸の被害状況が記録され、援助物資も町内会単位で配布されている（「湯川太兼文書」による）。

津波で漂流した者が海上で救助される幸運もあるが、漂流死体となって各地の海岸にたどり着くケースも多い。津波被災地から15kmも離れた海岸でも漂着死体はあり、伊東市八幡野や赤沢地区には、これらの死者のための墓標が残されている。

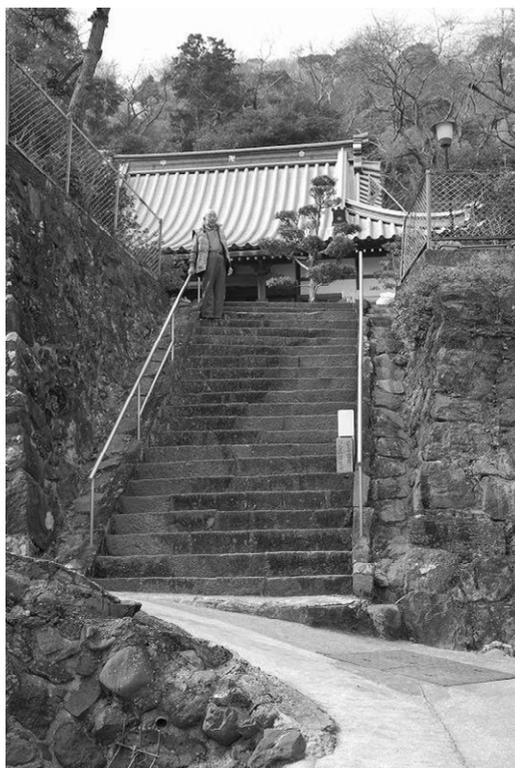
(4) 後世に伝える教訓とその方法

地震津波の体験は、親から子へ伝えられる場合もあるが、伊東市内の事例では、寺社の石階段に託されて語られる津波の記憶が多い。「元禄津波は上から三段目、安政の津波は下から三段」という具合である。また、冒頭に示した体験談は、行政側の呼びかけで行われており、教訓を含んだ貴重な体験を風化させずに記憶として残そうとする努力が、行政による防災教育として重ねられてきた。

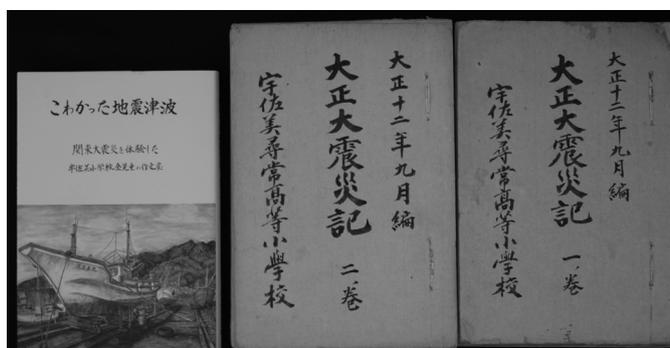
子供たちの記した作文の中にも多くの情報が記されており、近年、伊東市ではこれを復刻して刊行したが、より広い浸透力を持つ方法としては、地元新聞が取り上げた被害体験談の長期連載の新聞記事が注目される。年配者の声に耳が傾けられにくい時代だが、新聞への連載は働き盛りの世代層にも行き渡りやすい。

石碑に刻まれた慰霊碑も、熱海市では温泉寺境内に萬霊塔、伊東市では仏現寺に供養碑が、元禄津波のものとともに残されている。また、流失した神社の再建にあたり、津波の惨状を棟札に記した事例もあって、被災体験を語ろうとする強い意思が感じられる。

現代にあっては、企業活動は盛んに行われても、町内会や消防団活動などは希薄化する傾向がある。そうした中で、過去の教訓や年配者からの情報は、若い世代にはほとんど伝わらない情勢がある。防災、減災への取り組みとして、過去の災害体験を生きた教訓として若い世代にどう伝えていくかという大きな課題に直面している。



写真コラム3-2 伊東市川奈 海蔵寺の石段
この石段には多くの津波の痕跡が託されている。下から三段目まで来たのが安政の大津波、新しい石柱が立つ位置が関東大震災、住職の立つ位置が元禄地震による津波の到達点である。



写真コラム3-3 関東大震災の体験を期した
当時の子供たちの作文集(右2冊)とその復刻本(左端)
伊東市立宇佐美小学校には震災体験を経た作文集が保存されている。この貴重な体験を風化させないように伊東市立図書館では平成6年に復刻版を刊行した。